

松前健先生を思い出そう

三浦俊介

例年より早く桜が咲き始めた三月二十五日、松前健先生の奥様からお電話をいただいて、先生が前日の二十四日に他界なさったことを初めて知った。手術をなさったことは知っていたが、術後の経過が良いとお聞きしていただけにショックが大きかった。急いで先生のお宅に行き、先生と対面した。少し面痩せなさっていたが、いつもと同じ、おだやかな先生のお顔だった。しかし、笑顔で「やあ、三浦くん」と声をかけてくださることは最早なかった。私は立ちつくしたまま、「先生、長い間、お世話になりました。ありがとうございました。ありがとうございます」とつぶやいて手を合わせた。涙とともに先生との数々の思い出が浮かんだ。

文学部が衣笠学舎に移った次の年の春、今はない2号館の階段教室で、年度初めのガイダンスがあつて、古代文学の担当として松前先生のお名前が出た。名字だけの紹介だったので、古代文学に関心があった新三回生たち（文学部の学生としては広小路学舎で学んだ最後の世代）の間で、「ケン（健）先生」だろうか、それとも同姓の別人だろうかと話題になった。すぐに「健（たけし）」先生とわかって皆大喜びをした。それが立命館大学での松前先生の最初の思い出である。

先生の講義には三つの特徴があつた。一つは講義内容の脱線、もう一つは講義時間の延長である。第三の特徴は後述する。先生の講義は時に、その日の講義の主題から次第にずれていくことがあつた。ただし、脱線といっても松前先生のこと、その内容はあくまでも学術的なことであつた。そして、先生の講義は、最後には主題にちゃんと戻ってきた。逸脱の著しさと、本線への復帰の素早さ・見事に受講生はいつも驚嘆していた。その脱線と無関係ではないが、先生の講義はよく所定の時間を超え、休み時間に割り込んだ。次の授業時間に食い込むこともしばしばであつた。講義だけではない。学部の古代文学研究会で山の辺の道の文学散歩をした時には、先生の解説が余りにも詳しすぎて最終目的地に着く前にとつぶりと日が暮れて、参加者が途方に暮れたこともあつた。

話題を少し変える。昨年度、立命館大学文学部（夜間主）で「神話学」を教えさせていただいた私には記紀や神話に関して四つの宝物がある。一つ目は、二回生の「日本文学講読Ⅰ」での、国崎望久太郎先生による古事記の講読。テキストであつた岩波書店の日本古典文学大系「古事記 祝詞」には鉛筆で書き込んだ当時のメモが今でも光っている。二つ目は、二回生の秋に入会した説話文学研究会で初めてお目にかかつた福田晃先生に導いていただいた中世神話（本地物の室町時代物語）と、南島の生きている神話の世界。特に前者は現在の私の研究の中心となっている。三つ目は、三回生の時の岡田精司先生の「神話学」「日本史概説Ⅰ

（古代宗教史」の講義。先生の発言の一言一句まで書き留めた、我が生涯で唯一無二の詳細な講義ノートが常に私の座右にある。そして、四つ目が、松前先生に主査を、福田先生に副査をしていただいた卒業論文である。論題は「天稚彦神話の構造」。国崎先生の講読、岡田先生の講義などを通して、神話について勉強していた（つもり）。私は、生気にも、記紀神話の中で天稚彦神話だけ、まだ研究の余地があるように思つたのである。一生懸命に調べて、論文の枚数制限のギリギリ五十枚目の最後の「マスマで書いた。補注・参考文献一覧を六十一枚も付け、副論文」殯についての一考察」（本文補注等あわせて二十五枚）まで添付した。

今にして思えば、駄文を長々と読まされた両先生にはさぞかし迷惑なことであつたらう。その後、返却された卒業論文には松前先生の質問メモが挟まつていた。例えば「天若日子が穗日命のスケープゴートとはどういう意味か」とか、「イニシエーションと神の死との関係不明。もしくは説明不足」など、補注部分も含め挟み込まれた付箋は十五枚にも及ぶ。先生が拙論を丹念に読んでくださったってこと証左である。このメモも宝物である。

口頭試問は、私自身にはあつという間だったが、実際には他の人よりも長く、三十分もかかったらしい。ただし、試問の大半は松前先生による質問と、先生ご自身による解答と解説であつた。結果的に先生の自問自答になつてしまふ質疑応答は、松前先生の講義において非常によくあることであつた。これが先生の講義の特徴の第三である。先生からの質問に対して学生がほんの少しで

も答えあぐんでいると、先生は決まつて助け舟としてのヒントを出され、その一言がそのまま先生の長く詳しい解説へと展開していった。三年後の修士論文の口頭試問の折も、副査でいらした先生の私への質問はそのまま先生の自説開陳の契機となつた。

大部な著作集の中にも収め切れなかつた先生の該博な知識と、緻密な論理を知ることができる。今後は滔々と流れる松前節を聞くこともできない。あの見事な脱線ぶりを楽しむこともできない。すべては私たちの思い出の中にある。自分に負けそうになつた時、私たちは松前健先生の奮闘ぶりを思い出して、一歩でも前に進まなければならない。それが先生への恩返しである。

先生、ありがとうございました。そして、これからもよろしく
お願いいたします。

（みうら・しゅんすけ 本学非常勤講師）